

LETTER

GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO

Contents

- 1ページ Departure to a New World~AY2019 GraSPP Autumn Diploma Presentation Ceremony~
- 2ページ イノベーションとベンチャーファイナンス -いま東大でもベンチャーが熱い!-
「第5回金融資本市場のあり方に関する産官学フォーラム」の議論より
- 3ページ 学生インタビュー
- 4ページ CAMPUS Asia Field Trip Report: Hiroshima / TOPICS

Departure to a New World

~AY2019 GraSPP Autumn Diploma Presentation Ceremony~

The AY2019 GraSPP Autumn diploma presentation ceremony took place on Friday, September 13 at SMBC Academia Hall, International Academic Research Building.

56 students were conferred the diploma this September. The diploma was presented by Prof. Akio TAKAHARA, the Dean of the Graduate School of Public Policy, who congratulated the students on their completion of the program together with family members and GraSPP faculty.

The commendation ceremony for high-achieving graduates was also held. The Best Performance Award was presented to one student and the Outstanding Performance Award was presented also to one student.



Message from the winner of the Best Performance Award

Goong Hong TAN

Class of 2019, MPP/IP



Mr. Goong Hong Tan (front row center)

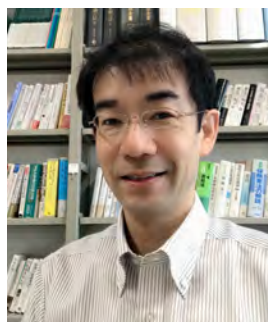
As I look back on my time spent in GraSPP, I can hardly believe that two years have gone by so quickly. While I have had many wonderful experiences, for the sake of brevity I would like to highlight what I will miss the most. The diversity of courses on offer at GraSPP is one such experience. Thanks to the bevy of classes on offer, I have been free to study broad, complex topics such as international relations while still being able to explore specific areas such as financial regulation. Furthermore, class discussions are always fruitful - owing to the excellent quality of instruction as well as the diversity of the student body. In fact, whether in class or outside, I have learned much through conversations with friends and colleagues who come from different backgrounds than my own. Whether it is debating policy positions, discussing current affairs, or exchanging personal anecdotes over a cup of coffee, such exchanges have truly broadened my own horizons.

Having graduated from GraSPP (a little older and perhaps a little wiser), I would like to take this chance to appreciate my teachers, family and friends for all that they've done for me. Lastly, I would like to wish my fellow cohort-mates nothing but the best for what lies ahead!

イノベーションとベンチャーファイナンス —いま東大でもベンチャーが熱い!—

「第5回金融資本市場のあり方に関する産官学フォーラム」の議論より

東京大学公共政策大学院特任教授 湯山智教



Society 5.0を担うイノベーション創出を掲げる我が国にとって、ベンチャー企業の成長サイクルであるベンチャー・エコシステムが今こそ必要だ。そのために必要なベンチャーファイナンスは、果たして十分に機能しているのか、制度と実際とのミスマッチはないのか。本欄では、「イノベーションとベンチャーファイナンス」をテーマとして開催された第5回「金融資本市場のあり方に関する産官学フォーラム」(2019年7月29日開催、みずほ証券寄付講座「資本市場と公共政策」の一環)の様相を紹介する¹(参加者は表の通り)。

まず3名の基調報告で、①ベンチャーキャピタル(VC)に関する人材面の課題として、起業家として成功(失敗)した人材が、ベンチャーキャピタリストやアクセラレーターを経て、再度起業家として取組む人的な循環がなされることが望ましいこと、②日本のVC出資が金融機関中心で年金基金・運用ファンド等の機関投資家が少なく、③VCファンドの規模が小さ過ぎるのがその最大の要因であること、④いわゆるユニコーンのように、ベンチャー企業の上場規模を大規模なものとするための一案として、IPO以外のエグジットの選択肢を増やすという観点から、非上場株式を証券会社が取り扱えるようにするのはどうか、といったことが提起された。

その後のディスカッションで最大の論点となったのは、年金基金に代表される機関投資家資金がなぜVC投資に向かなかったのかという点で、ここが米国などのスタートアップ先進国と大きく異なるためだ。ただ、年金基金等にVCに注目してもらうには何よりも規模が必要とのことだ。つまり、日本のVC規模は、年金基金等の機関投資家の投資サイズからしたら小さ過ぎ、小さいVCによるエグジットの結果として、小さいIPOが続き、引き続き機関投資家の投資対象とはならない、といった悪循環による鶏と卵の議論だ。いまソフトバンク・ビジョン・ファンドが有名だが、10兆円規模ファンドにとって、日本のベンチャー投資は規模が小さ過ぎ、残念ながら、投資対象のほとんどは海外のようだ。

ただ、東大人材に関して興味深い議論もなされた。近年の再度のベンチャー・ブームにより、これでもベンチャーの資金調達額は数千億円規模にまで増えてきたので、いま最先端での活躍を求めて優秀な人材がベンチャーにくるようになってきた。そして、まさに東大が一番熱いとのことだ!一昔前は、給料は安いけど熱いよといった人材を勧誘していたが、様相は様変わりし、今は資金調達金額が大きくなったので給与面で渋る必要がなく、熱い人間と最先端の仕事ができ、給料もキープされ、しかもストックオプションやアップサイドもあるという話だともう来ない理由がないわけだ。こうした好循環もあらわれ、我が国のベンチャーファイナンスを巡る状況も、改善方向に向かっているのもまた事実のようだ。この動きが更に後押しされ、Society5.0を担うイノベーションに繋がるのが望まれる。

¹ 議事概要・資料等の詳細は、みずほ証券寄付講座ウェブサイト「資本市場と公共政策」を参照。
(<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/CMPP/forum/2019-07-29/>)。また、月刊資本市場10月号(公益社団法人資本市場研究会)にも概要を寄稿。

第5回「金融資本市場のあり方に関する産官学フォーラム」 出席者

(50音順)*が基調報告者

有吉 尚哉	西村あさひ法律事務所 弁護士
磯崎 哲也*	フェムトパートナーズ株式会社 ゼネラルパートナー
岩澤 誠一郎	名古屋商科大学経済学部 教授
大崎 貞和	東京大学 客員教授(野村総合研究所フェロー)
小野 傑	東京大学 客員教授(西村あさひ法律事務所弁護士)
金澤 浩志	中央総合法律事務所 弁護士
川井 洋毅	東京証券取引所 執行役員
神作 裕之	東京大学大学院法学政治学研究科 教授
黒田 真一	みずほ証券 市場情報戦略部 上級研究員
小出 篤	学習院大学法学部法学科 教授
幸田 博人*	京都大学経営管理大学院特別教授
後藤 元	東京大学大学院法学政治学研究科 教授
柴崎 健	みずほ証券 市場情報戦略部長
保田 隆明	神戸大学大学院経営学研究科 准教授
増島 雅和*	森・濱田松本法律事務所 弁護士
松本 大	マネックスグループ社長
森本 紀行	HCアセットマネジメント 代表取締役社長
安田 洋祐	大阪大学経済学部 准教授
油布 志行	金融庁企画市場局審議官
湯山 智教	東京大学公共政策大学院 特任教授(司会)

学生 インタビュー

第32回

塩尻 康太郎さん (博士後期課程2年)



インド・ヒマラヤ旅行にて

—以前は外務省にお勤めだったそうですね

東大の修士を卒業して外務省に入省しました。2年間の米国留学後、在米日本国大使館で勤務し、そこで4年間勤めてから日本に帰国しました。その頃にGraSPPの博士課程のことを知ったのですが、「いつか博士号を取得したい」という夢があったので、上司とも相談して霞が関の本省に勤めながら昨年4月博士課程に入学しました。外務省での仕事はハードでしたが、日本のために働ける喜びがありましたし、一緒に働く人たちも優秀で志が高く、その中で昼夜問わず働きながら切磋琢磨する、とてもやり甲斐のある仕事でした。仕事と博士課程の勉強、両方ともやりたくて頑張りましたが、必修科目が平日昼間で通うこともなかなか難しく、徐々に自分の中でどちらか選ばなければいけないと考え始めました。「博士課程は応援するし、仕事を辞めなくてもいいのではないかと」親身になって相談に乗ってくださる方も多くいましたし、自分もできれば両立したかったのですが、博士への挑戦は相当なエネルギーを注がなければできないことだと思って、ものすごく悩んだ末、10年勤めた節目に決断して、今年5月末に退職しました。

—学生生活一本に絞られた中で、これからどんなことをやりたいですか？

学業の面では安全保障を理由とした経済措置がWTO法上、どのように位置付けられるのか、それが紛争解決の手続きの中でどう扱われていくのかに興味があります。外務省で外交分野に携わっていたので、実務の経験と学術で議論されていることを、どう自分の中で消化できるのか、研究してみたいです。あとは旅行ですね。外務省で勤めていた時、特に大使館時代はいつ緊急の連絡があるか分からないので携帯電話が通じない場所には行けません。今は自由なので、先日インド・ヒマラヤに行って1週間ほどキャンプしながらハイキングをして自然を満喫してきました。携帯を持たない生活をしたのはとても新鮮でした。

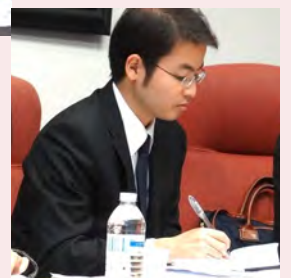
—「博士号を取る」という夢を実現した、その先は？

将来、どういう機会があるか分からないので、しっかり考えていきたいです。

外務省とは違って決まったキャリアパスがないですし、自分でどンドンドアをノックして切り開かなければいけないつらさや自分の名前で論文を書いて出していく怖さもあって、自分はどう勝負していけるのかと、正直、不安が襲ってくることもあります。でもメンターの方々に「焦って次の行動を決めずに、モヤモヤを楽しんだらいいんじゃないか」というアドバイスを頂いたので、今はちょっと我慢して、考えを深めていこうと思います。温かく見守ってくれる人たちが周りに多いことは本当にありがたいです。自分で決めた道なので、自分が責任を持って、やれることを精一杯やって、満足できる人生にしていけないといけないですよね。その成果が出るのは数十年先だと思います。そういう意味では大変な道に進んでしまった感がありますが(笑)。まずは博士課程を卒業して、いつかお世話になった方々にも認めていただけるような姿をお見せできればいいなと思っています。(インタビュー・文責 編集担当)



ヒマラヤで撮影



大使館(ワシントンDC)での勤務時。
日本からの要人の通訳を担当

CAMPUS Asia Field Trip Report: Hiroshima

Jae Hyeok LEE (MPP/IP, CAMPUS Asia Program)



As an East Asian Affairs major, memories of Pacific War and other regional history as well as how each nation and people remember them are crucial topic to me. With such interests, Hiroshima was undoubtedly a very interesting place for me to open my eyes and mind.

I was born and raised in Korea and received college education in the U.S. Thanks to CAMPUS Asia program, I was able to spend valuable times in China and Japan. During my time in Beijing and Tokyo, one significant factor I realized was how each nation views and remembers Colonial Period, WWII and the Pacific War. I believe these gaps are major factors that divide East Asia from cooperation and keeps three nations in distance.

From the way I see, *peace* means 'no more Japanese aggression as well as influx of communism (from North Korea)' for (South) Koreans. It mainly originated from the traumatic history of Japanese occupation from 1910 to 1945, and the ethnic tragedy of Korean War from 1950 to 1953. Similar but different, Chinese would define *peace* as 'no more Western invasion'. China remembers colonial period as 'a Century of Humiliation'. This implies that China has grown strong antagonism against the West and tries to make its own way without help or intervention of Western influence anymore.

It seems *peace* means 'no more atomic bombs' for Japan. It was very interesting to see how Hiroshima Peace Museum displays historical hardships. To be critical, it was disappointing a bit that the museum did not clearly indicate the cause and responsibility of the war; instead, it was fully

dedicating to show the inhumanity of A-bombs by showing the stories of the victims.

Despite my small disappointment, however, it was alarming for me to witness the victims of A-bombs in Japan. As a Korean, I have never taken Japanese victims into account when discussing the aftermath of war: Japan was closer to the term 'aggressor' than 'victim'. The trip expanded my perception that the Japanese people under militaristic nationalism were also the victims of this tragic history.

However, the biggest accomplishment was the friends I made throughout this whole program. As much as I realize the gaps and distances among our nations, I believe the ties we make would be the cornerstone for better relations. The more we understand others, the higher the chances would be to shrink the gap amongst ourselves not only politically, but historically, socially and culturally as well.

The mutual trusts can be soundly made only on the firm memory of our past. The trip to Hiroshima gave me this lesson not only to my head, but also to my heart.



TOPICS

2019年10月19日(土)、国際学術総合研究棟において、公東京大学のホームカミングデイのイベントとして同窓会(龍岡会)との共催で恒例の GraSPP Alumni & Student Day 2019を開催しました。今回で13回目となるイベントは、公共政策大学院修了生、在校生、教職員等が一堂に会し、交流を深める有益な機会となりました。

【GraSPP Alumni & Student Day 2019】

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/tag/homecoming-day/>



編集後記

初の日本開催となった第9回ラグビーワールドカップ2019。日本代表は初のバスト8入りという快挙を達成し、日本は空前のラグビーブームに沸きました。体の大きな相手にも諦めず、全力でぶつかり、仲間のために自ら犠牲になる姿や試合が終われば敵味方の区別がなくなる「ノーサイド」の精神は多くの人に感動を与えたことでしょう。自分のためを超えて、仲間のため、家族のため、国のため、世界のため、「何かのために」続けて努力し、力を尽くして行くことは、本当に格好いい！今秋、修了して社会に飛び立ったGraSPPerの皆さんの活躍を心から応援&期待しています。(編集担当)

vol. 56 NEWS LETTER

【編集・発行】東京大学公共政策大学院 【発行日】2019年11月7日

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp
<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/>